

「超基本声優テキスト」

・前書き

このテキストはタイトル通り声優に興味を持っている方に向けた情報を集めたもので、声優の声の基本を主題とし、演技の動きについては記載していません。

演技全般に全く役に立たないとまでは言いませんが、芝居の中でもアクションやパントマイム他声をの表現がない、少ないジャンルを目指している方には向いていません。

また、あくまで私見で時代も常に進むため古い表現や解釈があると思いますが、そこは寛大に見逃していただければと思います。

もくじ

「声」について ①

声の出るしくみ 発声の基本 呼吸方 呼吸のコントロール 発声

「発音」について ③

母音と子音 母音 二重母音 長母音 子音の鼻濁音 発音練習

「表現」について ⑧

アクセント イントネーション プロミネンス アーティキュレーション
フレージング ポーズ リズム 実践トレーニング

「補足として知っておきたい事」 ⑩

即効性のある演技ポイント 心理距離と物理距離 収録現場の噂
マイクの扱い リテイク、別録り

付属資料

「外郎売り」

「声」について

○声の出るしくみ

声は肺の中の空気が口から外へ出る前に、様々な器官が相互に関わりあって作られています。その器官の中でも声の大きさや音質を左右する重要な器官として声帯があります。

声帯は喉にある左右で対になっていて、声を出す時には緊張して両側から接近します。開いた状態になっていますが、声を出す時には緊張して両側から接近します。風邪をひいて声が枯れたりするのはこの声帯の収縮が通常と異なるためです。肺の中の空気が声となるまでの流れは、①呼吸運動（肺から押し出された空気が声帯を振動させるための力に変わる）②声帯振動（声帯が振動して音をつくる）③共鳴（声帯で生まれた音が口の奥の咽頭や口の口腔、鼻の鼻腔などに共鳴する）④調音（唇、歯、歯茎、顎、舌などによって言葉としての音をつくる）と、なっています。

声の大きさは肺から送り出される空気の圧力によって決まり、高さは声帯の振動数によって決まります。裏声は声帯を強く緊張させて出す調子の事です。

○発声の基本

まず初めにいかなるトレーニングに入る前にも体をリラックスさせましょう。ゆっくりとストレッチを行い顔や首の筋肉、間接なども意識してほぐしましょう。

トレーニングを行う適切な状態は諸説ありますが、仮に脱力、リラックス、集中、緊張と段階を分けた場合、発声はリラックス、演技は集中が標準的とおきます。

・呼吸方

・胸式呼吸

人が活動状態において自然に呼吸する時には多くにして胸式呼吸で呼吸しています。息を吸うと胸郭が広がり肺が膨らんで空気が入り逆の動作で空気が排出されます。

胸式呼吸のみで出した声を属に喉声と呼び、この声で大声を出すのがなり声になり聞きずらく遠くにも届きません。さらに長時間連続して喉声を出し続けると声が枯れやすくなります。

・腹式呼吸

胸式呼吸の他にも肩式呼吸と呼ばれる呼吸方もありますが声優において望ましい呼吸方とされるのは一般に腹式呼吸です。

腹式呼吸は横隔膜を意識してコントロールする事により、より多くの空気を出

し入れする事が出来るようになり、一気に出す、止める、細く長く出すなどの技術を必要とされる声優にとってはかかせないものです。

腹式呼吸を意識するための方法としては、まず仰向けに寝て腹部に軽く手を置きます。その状態でゆっくりと深く呼吸をして腹部が上下する事を確認します。腹式の呼吸を確認出来たら今度は少し重みのある本などを腹部に載せ、それが落ちないようにゆっくりと呼吸し腹式呼吸の感覚を覚えるようにします。

基本的に腹式呼吸が声優を含めた演技や歌唱では王道とされますが、脱力感や疲労感を表現するため胸式や肩式呼吸を用いる場合があります。

・呼吸のコントロール

まずリラックスしてまっすぐな姿勢で立ちます。この際に余計な力が入ったり、背筋がまがったりしないように気をつけましょう。

それから腹式呼吸を意識して呼吸を行います。

基本として1拍で息を吸い、4拍ほど止めできるだけ長く一定の強さで吐きます。

これをスーの音とズー（ZU）の音で行います。ズーの音で行う時はZの音が消えないように心がけましょう。慣れてきたら速さや拍数を変えてトレーニングします。

あー、で呼吸と発声を兼ねる場合も多いですが、慣れないうちや朝一は呼吸を整える段階で声帯を使うと負担がかかるので注意が必要です。

また、過呼吸にならない程度の深さで行いましょう。

尚、実際に台詞を読む場合は鼻から吸うようにするとブレスノイズが押えられます。

・発声

共鳴を意識したロングトーンの発声で自分の声を確認します。

1拍で息を吸い、ンーとハミングし音を鼻に当てる意識で共鳴させる。

鼻の共鳴を意識できたらアーの音に変えて顔全体に共鳴させるような意識で、できるだけ一息を長くする。

この際には喉に力が入らないようにしましょう。慣れれば少しずつ大きさや高さを変化させてみたり、ラッラッラッとスタッカーを入れて喉を開くトレーニングをします。

あまりに過ぎるとこもりにつながるので加減にも注意しましょう。

・強い声、遠くに飛ばす声

壁など目標となる物の前に1メートルほどの距離を置いて立ち目標に向ってアーと声をぶつける。しばらくして目標との距離を広げて距離を意識した声量で声を出す。この際には声を一本に通す意識を持ちましょう。

慣れてきたら、顔の向きや姿勢を変えても発声をコントロールできるようにトレーニングしましょう。

「発音」について

○母音と子音

母音は口の内部を通る息を唇などでほぼ妨げない状態で発音する音でひとつの音を長く出し続ける事ができます。これに対して子音は舌や唇などで息の通りを妨げながら出す音で長く出し続ける事が難しい音です。この両方の境界域に入る音を半母音といいます。

また、発声する時に声帯の振動を伴うものを有声音、伴わないものを無声音といえます。

有声音 母音あいいうえお、半母音やゆよわ（のように子音の役割をする短母音）子音なまらがざだば各行の子音。

無声音 子音かさはば各行の子音。

・母音

日本語では母音が重要とされるので口の形を鏡で見るなどして正しく発音できるようにトレーニングしましょう。

・母音の無声化

母音は声帯の振動をとまなう有声音ですが、前後の子音との関係によって発音されずに息だけが出て来ることがあります。これを母音の無声化といいます。例えば「く」の音は一音だと「k u」と発音しますが「くさ」と発音する時には「u」の口の形はしています。が声帯は振動せず「k」の子音が息とともに出て来るだけの「k (u) s a」となり母音が無声化します。

母音の無声化は母音が無声音の子音と子音に挟まれた時、機会「k (i) k a i」透く「s (u) k u」人「h (i) t o」や無声音の子音の後にくる母音が語尾になり、その音節にアクセントがない時、ガラス「g a r a s (u)」あげます「a g e m a s (u)」などが基本となりますが単語や方言などによって無声化しない場合もあるので詳しくはアクセント辞典で確認する事をお勧めします。

丁寧にゆっくり発音すると無声化しない事が多いですが通例としては発音できない音が当てはまります。

・二重母音

「あ＋あ」「え＋い」などのように母音が二つ続いているものを二重母音または連母音と言います。

声「k o e」なども「o と e」が続くので二重母音となります。

・長母音

二重母音の中には二つの母音が融合し、長く発音する場合があります、これを長

母音と言います。

例えばお姉さんは「おねえさん（oneesan）」と書きますが発音では「おねーさん」となります。ただし、母音が続いても「押し入る（osiru）」は「おしーる」ではなく「おしいる」と発音する場合などもあります。

・子音の鼻濁音

が行を発音する時にそのまま鼻に響かせると鼻にかかったような音になり、これを鼻濁音といい、響かせないものを濁音といいます。

地域や年代によつて鼻濁音を日常的に使用しない場合もありますが声優としては必要とされる事が多いです。最近では話し言葉に対しては慣用になりつつあります。さすがナレーションやアナウンスなどきれいな発音を求められる現場では技術です。

ただし、演出側が鼻濁音を使わない環境で生活している場合、こもっているだけと誤解されるケースもあるため、鼻濁音の度合いもコントロールできるように心がけましょう。

鼻濁音化して発音するものの例

- ① 単語の中間部分または単語の終わり部分にある「が」行の音。鏡「か（が）み」、道具「どう（ぐ）」など
- ② 格助詞や接続助詞。私（が）、くです（が）など。
- ③ 数詞の五を使用した名詞。慈五郎「じ（ご）ろう」七五三「しち（ご）さん」など。
- ④ 日本語化している外来語で「ん」の後にくる。ヤング「やん（ぐ）」など。

濁音のまま発音するものの例

- ① 単語の始まりにあるもの。「外貨」「月下」
- ② 外来語で「ん」の後に来ない場合。「ショットガン」「合成ゴム」など。
- ③ 名詞にあたらぬ数詞の五。「五十歳」など。
- ④ 接頭語がなければ語頭にくるもの。「朝ご飯」「空元気」など。
- ⑤ 擬態語や擬音語で同じ音を繰り返す場合。「ガラガラ」など。
- ⑥ 複合語は語中や語尾でも鼻濁音化されない場合もある。「小学校」「国会議員」など。

・発音と練習

あ行

アは顎を自然に大きく開いてあくびを途中で止めたような状態。唇は無理にまるめる事はなく舌を下顎に軽くのせて発音しましょう。

イは顎をほとんど閉じて口の両端を引っ張るようにし、舌は前方を盛り上げて口の奥に空間をつくって発音します。

ウは顎を閉じて唇をすばめ前に出し、舌の奥を高くして上顎の奥に近づけて発音します。

エはアとイの間くらい顎を開いて唇をやや左右に引き、舌の前方をアよりも

高く持ち上げて発音します。
オはウの口を基準にして、それよりも顎をやや開き、唇は少し丸めて舌の奥を少し上げ発音します。

共通練習例

「あいうえお　　いうえおあ　　うえおあい　　えおあいう　　おあいうえ」
これを始めはしっかりと口の形を作り丁寧な発音します。数回繰り返した後にすべてを一息で言えるように練習します。これを行って行で行います。

か行の子音は軟口蓋（口の内側、上部奥の軟らかい部分）についていた部分が息を吐き出して離れる瞬間の音で破裂音と言います。
この子音と母音のアイウエオを同時に発音するとカキクケコとなります。ただしキの音だけは舌の接点が他の音よりも前に移るので、舌の位置の違いを確認しましょう。

が行の発音方法は基本的にか行と同じですが、か行の子音は無声音であるのに対してが行の子音は有声音になります。が行の子音はか行の子音よりも強い破裂音なのであまり強く発音すると耳障りに聞こえるので注意しましょう。
が行鼻濁音の口の開きはが行と同じですが、舌の奥の部分の舌を強く膨らませて喉の奥につけるようにすると、鼻にかかったが行になります。感覚をつかむためにはンガのようにンをつけて少し大きめに鼻にかけてみましょう。

さ行の子音は舌と上顎を接近させて、その狭い間から息がこすれるように出る音で摩擦音と言います。
サスセソは前歯の裏に息を当てるように発音し、シの音は上の歯の歯茎全体に息を当てるように発音します。そのためスイの音ではなくシーの音となります。また、さ行を発音する時に歯と歯の隙間から息が漏れすぎると聞きづらくなるので注意しましょう。

ざ行の子音は舌先を上歯の裏につけてふさいだ息の通り道を吐く息で押し破って破裂音をつくり、さらにその隙間から息を通してつくりだす音で摩擦音と言います。
ざ行の場合は舌先が歯茎の裏に接触しませんが、ざ行は接触します。ジの音はズイとにならないように注意しましょう。

た行の中のタテトは舌の先を上歯の裏につけてそれが離れる瞬間に息を吐き出して音を出します。これはか行の破裂音と同じです。チツは摩擦音になりテイトウにならないように注意しましょう。

だ行のダデドは破裂音でタテトと同じ口になりますが、た行の子音が無声音であり、だ行の子音は有声音となっています。

ヂヅの発音はジズと同じです。

ざ行とだ行は発音方法が似ているのでわかりにくくなりやすいので注意して発音しましょう。

な行の子音は舌先を歯茎につけたまま吐く息を鼻から抜いて出す音で鼻音と言います。
ただニの音は他より舌を硬口蓋（口の中の上部の硬い部分）の近くにつけて発音します。ニヤ、ニ、ニュ、ニエ、ニヨはこの要領で発音します。

は行のハへホは子音に母音を合わせて発音するので口は母音と同じにし、喉で音を調整します。
ヒはシと口の形が似ていますがシよりも舌の中ほどを持ち上げて音を出す摩擦音です。
フは少しだけ開けた唇の間から息がこすれるように出て来る摩擦音です。上下の唇と歯を接触させずに発音します。

ば行の子音は閉じた唇を開く瞬間に出す破裂音です。
バの音は語頭にあると強く破裂しますが、語中にあると破裂が弱くなり摩擦音に近くなりますので違いを確認しながら練習しましょう。

ぱ行はば行の発音方法と同様の破裂音ですが、ぱ行の子音は無声音になります。
ば行との違いを意識しながら練習しましょう。

ま行の子音はば行と同様に閉じていた唇を開きながら発音しますが、破裂音ではなく、な行のような吐く息を鼻に抜いて出す鼻音です。
鼻濁音と同じようにンをつけて練習すると鼻音である事を意識できるでしょう。

や行のヤユヨは口の形をイにしてから、アウオと発音と発音するとヤユヨと発音できます。
や行を構成する音は単独では音節をつくらないという子音的な性質を持っているので半母音と呼ばれます。

ら行の子音は舌先を硬口蓋の方に反らして隙間から息を出して摩擦音を発してさらに舌先で硬口蓋を弾いて歯茎にぶつけながら発音します。
巻き舌は舌先で硬口蓋をニ、三度弾くために起こる音です。

わ行のワは口をウの形にしてから発音する音でや行と同じ半母音です。
従来わ行はワの他にもイウエヲがあり「ウイ」「ウエ」「ウォ」としていましたが、現在ではヲもオと同じ発音になりわ行の発音として明確に使い分けるのはワだけになります。

んは舌の奥の表面を上げて息が出ないように口を閉じてその息を鼻に通して跳ねるように出す音で、発音と言います。
表記上ではン的一种類しかありませんが、唇や舌などの使い方では表現は数種類あり、ンの後に来る音によって分類する事が出来ます。
ぱ、ば、ま行の場合は唇を閉じてつくる音になる傾向があります。（損保、看板、不鮮明など）
さ、た、だ、な、ら行の場合は舌先と歯茎を使った音になる傾向があります。

（建造、検体、寝台車、年内、信頼など）
か、がの場合は舌の奥と軟口蓋でつくる音になる傾向があります。（真剣、漢学など）
詳しくはアクセント辞典で確認しましょう。

各行の単語の練習などはアクセント辞典や国語辞典などを利用しましょう。
ここでは最も基本的な発音を記載しましたが、キャラクターや場面によっては
フをウオと個性を立たせる事も多く基本を押えたら1音でも個性が出せるよう
なトレーニングも行いましょう。

「表現」について

・アクセント

日本語では基本的に発音の高低でアクセントを表現（日本語以外は強弱も多い）します。

① 平板型 音が同じ高さのままで推移する語。（例ゝ電話、正しい）

② 頭高型 第一音が高くてその後の音が下がる。（例ゝさらに、出る）

③ 尻高型 最後の音節までは高く最後が下がる語。（例ゝ妹）

④ 中高型 語中にある音節の後に下がる語。中一高、中二高、中三高などがある。（中一高例ゝ小芝居）

最もベターなアクセントは辞典参照を願いますが、方言や新語については日常的に使用している方をベースとするのがよいでしょう。

・イントネーション

イントネーションは抑揚とも言われる言葉の音階的な高低の事です。アクセントが単語の基本であるのに対してイントネーションは言葉の表現を決定するものです。

昇調 終わりを上げる。（例ゝ疑問 出た？ 、呼びかけ パパ）

降調 終わりを下げる。（例ゝ肯定 そうです、命令 走れ！）

補足 アクセントとイントネーションの意味そのものが混同されたり、今回の記載と逆の資料もありますが、お芝居など表現としての言葉は概ねアクセントとイントネーションを組み合わせて発音が成立すため後工程にあたるイントネーションにアクセントの意味を含ませても語意としては間違いではないでしょう。

しかし、日本語アクセント辞典が存在しているので、ここではアクセントを基準、表現へのプロセスとしての抑揚をイントネーションとしました。

・プロミネンス

プロミネンスとは文中の一部の言葉を特に強調する事を言い、擬音や感情にかかる言葉に多く用います。

プロミネンスを活用すると聞き手により分かりやすく表現できますが、場合によつては単語や文節のアクセントを壊してしまうので注意が必要です。

低く弱く発音する。（冷気がさーっと入って来た）

伸ばして発音する。（だーい好き）

速く発音する。（テキパキしなさい）

間を開けて発音する。（嫌いなものはきらい）

・アーティキュレーション（滑舌）

音の切り方や次の音との続け方の事で、一般的には歯切れや舌滑と言われるものです。

発音する時に舌がもつれたり歯の隙間から息が漏れてしまうなどアーティキュレーションが悪いと言葉の一音一音が不明瞭になり聞き取りにくくなってしまう。

早口言葉を練習し自分の苦手な行を克服するようにすればアーティキュレーションは改善されるでしょう。

例としては、何度も繰り返し返すのに加え、ゆっくりと口に馴染ませるように読む、無理でも通常以上に早口で読み口が回るようにする、などプロの方々でもその人なりのコツがあるようなので、どのような方法が自分に合っているか試しておくのもよいでしょう。

・フレージング

フレージングとは意味を正しく伝えるために適切な位置でフレーズを切る事で句節法や句切り法とも呼ばれています。

通常、文章には句読点がついていますが、芝居の中での台詞は文法的な事よりも台詞の心情などを考慮してフレージングを行います。フレージングによって台詞の性質が大きく変わる場合もあるので意味が改変されない程度に注意しましょう。

・ポーズ

ポーズは間や溜めの事で音声の途切れた沈黙を言います。

フレージングも含めて記載、教えている場合もあります。

ポーズによって台詞の印象が大きく左右されますので使いどころは十分に配慮しましょう。

ポーズの種類や効果

意味の切れ目 前後の意味や内容が切れている。

強調 ある言葉を際立たせ強調する。

注目を集める 聞く側の注意が散漫になった時などに若干の沈黙で注目を集める。

期待を持たせる 次の言葉や話に興味を持たせる。

誘い 質問や合いの手などの反応を誘い出す。

次の言葉を選ぶ 次にくる言葉を選んだり探している。

考えさせる 時間を与えて考えさせる。

言葉を失う 頭の中が白くなる。

驚く 自分の言葉や相手の反応などに驚く。

気持が変化する 話の間に気持が変化する。

余韻 話の余韻を味わう。

終息 終わりの気分にさせる。

・リズム

リズムとは音の長さや強弱によってつくられた音声の流れや調子のことです。

アクセントやポージングなどによりグループ化された言葉のつながりです。

台詞のリズムを決定する場合には作品全体から見た台詞の位置を十分に考慮しましょう。

○実践トレーニングの方法

表現はアクセントとアーティキュレーション以外、分かりやすい正解の形がありません。既存の作品などを利用し多くの作品を通じて作品に入る感覚を身につけるようにしましょう。

朗読 朗読のトレーニングには文学的な作品、主に純文学を利用しましょう。通常朗読は一人で行い全ての読み分けをこなさなくてはなりません。登場人物や地（会話以外の文章）などをトーンやリズムを駆使してより分かりやすく表現できるようにしましょう。基本的な発声やアクセントなどをチェックするために重要なトレーニングです。また、台詞以外を読んだり、行間を組んだり、海外の文化を取り入れられるのもトレーニングとして有用な点です。

ナレーション ナレーションのトレーニングにはCMの台詞やパンフレットなどを利用しましょう。的確な情報を伝える面ではアナウンスに似ていますが、アナウンスが情報を客観的により正確に伝える事を目的としているのに対してナレーションは読み手、作り手の主観を含めた表現を求められます。聞き手がイメージを膨らませられるような表現を心がけましょう。アナウンスは同じ素材でもできますが公共放送（防災無線）なども参考にしましょう。

ラジオドラマ 実際の台詞のトレーニングには戯曲、シナリオやマンガなど台詞言葉を多様しているものを使用しましょう。ライトノベルも純文学よりキャラクター性が強調されている場合が多いため題材として活用できるでしょう。得意なキャラクターを磨いたり、様々なジャンルやキャラクターを演じる事で演技の幅を広げる事を心がけましょう。

「捕捉として知っておきたい事」

・即効性のある演技ポイント

基本からコツコツとトレーニングする事は大切ですが、今ある台詞をいかにこなすかも重要です。
自分の演技に納得いかない場合は「速度」「高低」「強弱」のポイントを意識するとただ漠然と違うと考えるよりの確に問題点が見えて来るでしょう。
それから相手の台詞もよく聴く事、台詞のやり取りで誰がイニシアチブを取っているのか理解すると自然に台詞が出て来るでしょう。

声優の演技のスケールとしては舞台と実写の間と考えるとよいでしょう。
同じ声優の現場でもアニメーション、吹き替え、ゲームでは随分違うと覚悟し調整できる気持ちの余白は空けておきましょう。
また、もつとも単純で重要なのは分からないことは質問する事です。必ずしも正解や納得のいく回答が得られるとは限りませんが、一人で沼に沈んでいくのは避けましょう。

・心理距離と物理距離

お芝居でも実生活でも距離感という言葉は耳にするとと思いますが、これを声の演技で表現するには？と考えた事は少ないと思います。
物理的に車道を挟んだ反対の歩道や競技場のスタンドから、頬が触れるほどなど明確な基準、画面レイアウトが決まっていればそこにキャラクター性を加えるだけです。夢や空想、ト書きが少ないラジオドラマやゲームの台本から距離感を捉えるのは難しいものです。
そこで、予め相手との心理距離を感覚的に定義しておき、それに場面の演出を加えると距離感を掴みやすくなります。
例を挙げると、相手との関係性で他人なら双方が一步踏み出しても手が届かない程度、知人なら互いに一步踏み出せば手が届く、嫌ってはいないクラスメイトや同僚なら片方が一步踏み出せば手が届く、友人なら付き合いの深さによって互いが手を伸ばせば届く距離から一方が手を伸ばせば届く距離の間、親密な関係なら手を伸ばさなくても肩が触れる距離、といったところで、これに状況とキャラクター性を混ぜればヒントにはなると思います。
ただし、ゲーム等で相手に選択を委ねる場合はニュートラルな演技を求められ、外画では日本人とは距離感が違ったり、根本が違う場合も多く柔軟性は常に求められます。

・収録現場の噂

収録に臨む際には服装にも気を配りましょう。
声優における収録では無駄な音つまりノイズは一番嫌われるNGの原因です。ペーパーノイズやリップノイズに気をつける事はよく言われますが服装においても同様です。多くの場合立ち姿勢で収録が行われるので動く事でされる音の

出る服や靴、特に皮製品はきしみ音が出やすいので気をつけましょう。この他にもアクセサリは極力避けた方が無難です。金属製のブレスレットやネックレス、リングなどは当然の事で時計についても針音やアラームには十分気をつけましょう。腕回りは台本を持ちマイクに接近する確率が高いので特に注意しましょう。しかし、趣味嗜好は自由なので好きなブランドで音が鳴りにくいものを選ぶ、現場では外すという選択肢もあります。靴も動き易く音の出にくいものを常用する方から、現場では脱ぐ、現場用の柔らかいものを携帯する方もいます。

他の役者さんや設備との接触にも気をつけなければなりません。

台詞以外が全てノイズとして乗ってしまうわけでもありませんが、機械的な技術が進歩すると共に細かい音も拾われやすくなっています。

座席の話題も時折耳にしますが、重要な役ではなく現場で若手の場合は入り口付近に席を取り、ドアの開閉や雑用などを補助するのが慣例のようです。

挨拶についても初回の主要キャスト挨拶以外で新人が挨拶に回る慣習がありますが、覚えられないからいいよ、と断るベテランの方もおられるようです。こんな場合は固まってしまうことが多いですが、これはほとんどの場合イジワルではなく他意なしに覚えられないから、面倒だから、との理由が多いようです。また、次に覚えていないと悪いから予防線を張っているケースもあるようです。ただし、断られたとしても、その現場が全員そうだとは限らないので挨拶する姿勢は持ちましょう。

・マイクの扱い

現在のアフレコ現場では広くコンデンサー型のカーディオイドタイプが使用されています。

コンデンサー型マイクとはカラオケなどで使われているダイナミック型マイクとは構造が異なります。みなさんのよく使うダイナミック型マイクは内臓されたコイルに音の振動が加えられると摩擦で静電性電流が発生し、それが音声信号として送られる構造をしています。このマイクの利点は構造が単純なためコストが低く衝撃などにも強いタフなマイクであるということです。

一方コンデンサー型は内臓の振動板やコイルに電流をあらかじめ流しておいて音の振動を受け取る構造になっています。このため微弱な振動にも反応がよく、より忠実な信号の伝達が可能となっています。ただ、ダイナミック型よりもコストが高く構造的に過度な衝撃には弱いので取り扱いには注意が必要です。無駄に叩いたり接近して叫んだりすると振動板が破損する事もあります。マイクとの距離は30センチ〜60センチほどの距離を取り、普通の台詞で3メートル先の人に話すくらいの声量が適切だとされています。

カーディオイドタイプとは単一指向性の事で正面の音に反応する特性を持っています。一般には中心より90度〜30度以内が適正範囲である事が多く、あまり中心より外れた所で音を出しても正しく信号化されません。距離と共にマイクとの角度も注意しましょう。単一指向性の他にもより範囲の狭い狭指向性や範囲の広い双指向性、無指向性があります。

稀にリボン型というのがありますがこれは電流の有無ではなく構造を表したもので、リボンのような箔で振動を受けます。以前は繊細な音を再現できることからよくスタジオにありましたが、コンデンサーマイクより管理が難しく、ダ

イナミック、コンデンサーマイクの音質が向上すると共にアフレコや音声収録の現場では見かけなくなりました。しかし、音楽の収録では使用される事もあるため、アーティスト活動を伴う場合は出会う可能性があり、使用する場合は取扱いには注意を払いましょう。

おまけとして書くとは本の位置は必ずマイクと重ならないようにしましょう。正面に持つと読みやすいですが音が遮られてしまうため小さくもった音として伝わってしまいます。一人でマイクを独占できる場合はマイクの後ろに持つような意識で、数人でマイクを囲む場合は指向性範囲より外れたところで持つように気を配りましょう。

・リテイク、別録り

現在では、デジタルデータとして録音するため後編集もやりやすく、リテイクに寛容になってきていますが、失敗に厳しい現場もまだまだあります。歴史的には録音が音の振動を針で蠟管や樹脂板に刻み込むやり直しができない機械から始まり、光学録音や磁気テープの録音でも物理的にテープなど記録媒体を切断し、つなぎ合わせる作業や別テイクを同時に再生しミキサーでOKテイクのみを出力し再録する作業がされていました。

当然ながらこの時代は一言や一行のみのリテイクは難しく、カットやシーンの頭からのリテイクでした。

このため、この時代を経験した役者さんやその後輩はまず失敗しないこと、止めないことを最優先としています。

現在の現場でもいかに便利にデータの移動ができるとはいえ、テイク数が多いと作業工程が増えるため本来クオリティを上げるための時間を単なるつなぎ合わせやリテイクに割かれることは嫌われます。

もちろん、こだわりの台詞でテイクを重ねたりすることはありますが、噛まない事、流れない事は今でも重要です。

別録りは主にギャで行われますが、兼ね役、被せのある台詞も現場により別録りをします。単純にスケジュールの都合もあります。

また、ゲームではキャラクター別に単独で収録されるケースがほとんどですが、アニメーションパートや、選肢肢がないドラマパートは掛け合いで録る場合もあるようです。

・総体的に

声優、俳優においての良い声とは美しさや透明感のみではありません。聞き手にとって聞きやすい、心地よい声、意図が伝わる声、つまり正しい発声によって出され、意味の込められた声が声優として求められる良い声とよく言われます。

プロでもかすれた声や鼻にかかった声などの個性を持って活躍しているように誰もが正しい発声を見につければ良い声を出せる可能性を持っていると言えるでしょう。

ただし、個性とクセは違うとも言われることも多く、地声が有利か不利かは判断が難しいです。

しかし、求められる声、であることはいつでも重要で自分を活かしつつ作品や

演出と折り合いをつけ、よいものを仕上げる姿勢も忘れないで下さい。

どのような練習を行う時でも客観的に自分を知る事は重要です。レコーダー（アプリ）などに自分の声に録音し分析する事も忘れないようにしましょう。また、他者に意見を求める事も大切ですがデジタル回線の電話は通信の効率化のためサンプリングされた似た声が届いていて本当の声が相手に聞えていない事は予め理解しておきましょう。

練習を有効的に行うには明確な課題を持って行う事が大切です。短時間の練習で多くの課題を克服するのは大変難しい事で基本から段階的に進めて行きましょう。自分の声をよく聞き長所を伸ばし欠点を補うように意識をしつかりと持ちましょう。

・あとがき

このテキストは音芝居企画室（休会）で資料を集め声優として必要最小限の情報に記載したものです。このテキストをきっかけとして広く役者に興味を持って頂ければ幸いです。

現在では多くの教本が発刊されており図書館などで覗いてみるのもよいでしょう。

より高く大きな目標を持ち今必要な課題に取り組み、まじめさの中にも楽しみを見つけ、継続してトレーニングする事を心がけましょう。

ただし、トレーニングする場所、時間には気をつかい、周囲に迷惑をかけないよう心がけましょう。

著作権利は個人利用のラインはクリアできる程度は確認していますが、書籍や電子データが溢れる時代においては、オールクリアは正直厳しいです。

ただ、似ている点や表現があってもこのデータが個人の知識をまとめた個人のための販売しない参考物としてご理解いただけると幸いです。